

# 唐詩に見る箏の受容と演奏実態の考察 ——他の楽器との比較を通して——

Observing the Acceptance and Performance of Zheng from Tang Poetry:  
By Comparing with Other Musical Instruments

李 嫣 寒  
LI Yanhan

キーワード：箏、唐詩、演奏実態

## 1. はじめに

### 研究目的

様々な王朝の栄枯盛衰を経た後、唐代において箏は漢民族的な音楽の性質をもつ重要な楽器の一つと見なされようになったことが『旧唐書』(945年)、『新唐書』(1060年)といった歴史的な史料<sup>1</sup>を通してわかる。唐代の箏についての記載はこれらの史料にとどまらず、唐代の詩人たちもしばしば音楽や楽器に言及した作品(唐詩)を残している。唐詩は唐の時代についての史料研究における重要な文献の一つと見なされており、それらの中でも音楽を扱った、いわゆる「音楽詩」は唐代の音楽の研究において重要な役割を果たしている。これらの音楽詩はそれぞれ唐代の箏、琴、琵琶、笛などの楽器と楽人の演奏について記述しており、とりわけ箏を扱ったものには、箏の演奏用語、楽人の演奏の様子、そして音の描写が含まれている。筆者はこのような特質をもった音楽詩の研究を通して、唐代当時の箏の演奏や受容の実態を知る大きな手掛かりを得ることができると考える。

このような背景を踏まえて、箏を取り扱った詩から唐の時代における箏の演奏を考察し、唐代における箏の演奏場面や受容を明らかにすることが本稿の目的である。本稿では特に『全唐詩』(1706年)の中でなんらかの形で箏をタイトルや詩行に含む詩を抽出し、考察した。

さらに、唐代の音楽詩における他の楽器のイメージと、それらの楽器についての詩人たちの描写を考察し、他の楽器と箏の相異点を検討することで、箏という楽器のもつ特性を明らかにすることを目指した。

### 先行研究

唐詩における音楽に関する先行研究は中日両国で見られるが、管見の限りでは日本におけるものが多いようである。これらの先行研究には、唐詩における音楽ジャンルを扱ったもののほか、楽器の音楽描写にも及んでいるものも見られる。

中木愛「白居易の音楽描写における「音」の要素の盛り込み方」(2006)は取材範囲が広い。白居易(772~846年)が音楽を具体的に描写するために、故事、音韻用語、音楽専門用語などの表現手法を複

合的に採用していると説明し、白居易の表現の独自性と根底に流れる創作意識を明らかにした<sup>2</sup>。また、中木は音韻用語のうち、唐代の琵琶の用語を詩の中の描写に基づいて提示した。音楽の専門用語の使用の項では唐詩中の奏法の用語を抽出しているが、詩人によっては同じ用語を使うことで奏法を詩の中に表現していると中木は考えている。具体的な指摘として、唐詩の琴と琵琶に関して、絃<sup>3</sup>楽器特有の指法<sup>4</sup>（挑、撮、撥など）が詩の中に記されているが、それらは唐代に盛んに行われたというものである<sup>5</sup>。

吉田聡美「全唐詩における音楽描写—琴—」(1984)では、唐詩の音楽描写には二つの種類があると考えられている。一つは直接的な音楽描写であり、当時の音楽用語が具体的に何を描写しているのかを例示している。もう一つは間接的な音楽描写で、音楽の情緒や情景、風景を通して何が描写されたのかを考察している。

谷口高志「唐代音楽詩における楽器のイメージ—琴・箏・琵琶・笛—」(2003)は、唐代の音楽詩における琴・箏・琵琶・笛の描写を通して、各楽器のもつ固有のイメージを述べている。また、谷口「唐詩の音楽描寫—その類型と白居易「琵琶引」—」(2006)では、唐代の音楽詩は楽器や演奏者が吟じることだけではなく、演奏される音楽を「聴く」ことに重点が置かれているとし、各楽器の固有のイメージが音楽描写にも影響を与えていることを指摘している。

中純子は『詩人と音楽』(2008)の中で主に白居易の音楽詩を対象に考察している。中は聴覚を表す言葉の分析から始め、さらに詩に詠まれた夜の音楽の様子から、音楽と夜との密接な関係を指摘している。しかし、ここでは琴の詩が中心に考察されており、箏にはあまり触れていない。中純子『唐宋音楽文化論』(2020)では、唐代の音楽詩における洞簫のイメージと、音楽詩に描写された内容が検討されている。

山本敏雄「秦箏」あるいは「箏」について—白居易の文学と音楽のための覚え書—(1998)では、白居易の音楽詩を例に、「秦箏」がどのような楽器であったかを論証し、唐代音楽における箏の使用の様子について考察している。

一方、中国の研究では、謝明が「唐代箏楽研究」(2007)において、唐代の箏の形態と演奏する楽人について言及している。その中で箏に従事する楽人については、唐詩を用いて調査し、詩の内容から楽人はアマチュア、プロ、文人に区別が可能であることを指摘した。また、詩の中の箏の奏法の一部もまとめているが、当時、箏が演奏された場面やその特性については触れていない。

張雨萌「唐代渉楽詩」(2020)では、唐詩の中で音楽描写が見られる詩を考察している。対象となった詩の描写を通して、様々な楽器、楽人に関する記録が見られ、音楽に関わる描写も見られることを指摘している。張は詩が社会生活の縮図であると主張し、現実を記し、民間の実態を反映したものととらえている(2020, 77)。この点に関して、中純子は唐詩を「歴史事実を記録したものではない」と歴史資料として用いる危うさを認識した上で慎重に音楽資料として読み解く姿勢を貫く<sup>6</sup>。本稿においても、唐詩の中で音楽に関する記述について歴史的記録としての価値を見極めながら論ずる必然があるだろう。

以上の先行研究を踏まえて筆者は唐詩中の箏の描写に関する内容が歴史的記録としえるかどうかを吟味しながら、張(2020)では詳しく説明されていない箏の演奏の場面や、箏の奏法、楽人について

考察することとした。

これら中日両国の先行研究は詩に描写された音楽的内容と、箏の持つイメージを明らかにしているが、箏の演奏場面や演奏用語などについて解明しているものは見当たらない。これまで唐詩から箏の演奏実態があまり考察されてこなかったことを踏まえ、本稿では唐詩における箏の描写を調査する。

## 2. 全唐詩において箏が扱われる詩について

本稿では、『全唐詩』に見られる箏をなんらかの形で取り上げている詩を検討する。『全唐詩』は康熙四十五年（1706年）に、彭定求、沈三曾、楊中訥、汪士鋐、汪繹、俞梅、徐樹本、車鼎晉、潘從律、查嗣璣の10人が奉勅して編纂した。全900巻と目録12巻から構成され、48,900余首を収録する。『全唐詩』のうち、楽器の演奏を描いた唐詩は約470あり、そのうち箏に関する詩は43編である。

ここでの具体的な作業としては、対象とした詩から詩人、詩の題名、奏法にまつわる用語、演奏場面を抽出し、2では詩人、3.1では詩の題名、3.2では奏法の用語、3.3では演奏場面を中心にデータに整理した。これらを考察することで、箏をとりわけ題材とした詩人についてや、彼らが創作に際して箏をいかに題材としたかを明らかにする。また、唐代において箏がふさわしいとされていた場や場面毎の音楽的な効果を見出し、そのような音楽を実現するためにどのような奏法が用いられていたのかを跡付けることができると考える。

唐代に音楽詩<sup>7</sup>を創作した詩人は非常に多いが、とりわけ箏に関する詩を書いた詩人は白居易（772～846年）、顧況（生没年不明）、李白（701～762年）など33人にのぼる。以下がその一覧である。

詩人	生没年	出身	備考
李嶠	645～714年	趙郡贊皇（河北省贊皇県）	唐の宰相
陳子昂	659/658/661～700/ 699/702年	梓州射洪（現在の四川省）	唐の詩人、文学者
張九齡	673～740年	韶州曲江（広東省韶関市）	唐の詩人、政治家、文学者
徐安貞	生年不明～743年	浙江省竜丘県	唐の詩人
王維	693/694/701～761年	河東蒲州（山西省永済） 本籍：山西省祁県	唐の詩人、画家
王昌齡	698～757年	不明	唐の有名な詩人、役人
李白	701～762年	山東省	「詩仙」と称される唐の偉大な詩人
崔顥	704～754年	汴州（河南省開封） 本籍：博陵安平（河北省衡水市）	唐の詩人
儲光羲	706～763年	潤州延陵（常州）、本籍：兗州	唐の詩人、役人
常建	708～756年	邢州あるいは長安（陝西省西安）	唐の詩人
岑參	718～769年	荊州江陵（湖北江陵県）あるいは南陽棘陽（河南南陽市）	唐の詩人 音楽歴：箏
柳中庸	生年不明～775年	蒲州虞郷（山西省永済）	唐の詩人
司空曙	720～790年	広平（河北永年）	唐の詩人
戴叔倫	732～789年	潤州金壇（江蘇省常州市金壇区）	唐の詩人

盧綸	739～799年	河中蒲県（山西省蒲県） 本籍：范陽涿県(河北省涿州)	唐の詩人
李端	743～782年	趙州（河北省趙県）	唐の詩人
楊巨源	755～不明	河中治所（山西省永濟）	唐の詩人
劉禹錫	772～842年	河南省鄭州、本籍：河南省洛陽	唐の詩人
白居易	772～846年	河南省新鄭、本籍：山西省太原	唐の詩人 <u>音楽歴：琴</u>
元稹	779～831年	河南省洛陽	唐の詩人、文学者
殷堯藩	780～855年	浙江嘉興	唐の詩人
張祜	785～849年	清河（邢台市清河県）	唐の詩人
李賀	790～816年	河南府福昌県昌谷郷（河南省宜陽県）、本籍：隴西郡	唐の詩人
李商隱	813～858年	懷州河内（河南省沁陽市）	唐の詩人
薛能	817～880年	河東汾州（山西省汾陽県）	唐の詩人
唐彦謙	生年不明～893年	并州晋陽（山西省太原）	唐の詩人
呉融	850～903年	越州山陰（浙江省紹興）	唐の詩人
李遠	生没年不明	夔州雲安（重慶市雲陽県）	唐の詩人
顧況	生没年不明	蘇州海塩県(浙江省海塩県)	唐の詩人
王湾	生没年不明	洛陽（河南省洛陽）	唐の詩人 <u>音楽歴：箏</u>
王諷	生没年不明	不明	唐の詩人
温庭筠	生没年不明	太原祁県（山西省）	唐の詩人

表1 箏を詩に詠んだ詩人

これらの詩人は官吏の任に就いていたが、同時に詩を書くことにも長けていた。唐代は文学、中でも詩が最も発展した時期である<sup>8</sup>。また同時に、唐代は中国の歴史の中で音楽が最も発展した時期の一つでもあり、皇室、貴族、文人の間で音楽を聴くことが一般的になった<sup>9</sup>。関（2006, 13）が「唐代の詩の発展は宮廷音楽の歌舞に対して深遠な影響を与える」と述べるように、唐代には文学と音楽が互いに影響を与えながら発展した。そのため、この時代では音楽と詩の関係が強く、箏の音楽の実態や変遷なども詩の中で表現されることがあったと考えられる。

### 3. 箏が取り扱われる詩の具体的な考察

本節では唐代音楽詩の抽出を通して詩の中の箏の演奏用語、演奏場面について具体的に考察する。

#### 3.1 「箏」に関する題目について

唐詩の箏に関する詩の多くは題目に表現されている。これらの箏の詩の題目から二種類に分けることができる。

一つ目は、「聴」、「観」、「聞」という言葉を主とし、詩人自身が箏の演奏を聴いた印象を詩の題目に表現したものである。二つ目は、箏に従事する楽伎<sup>10</sup>が題目から判断でき、楽伎が箏を演奏する場面

が詩の中に表現されているものである。題目に箏の字が用いられた代表的な詩を表2にまとめた。

	題目	巻数	作者
①	聽箏（箏を聴く）	卷四八	張九齡
	觀搗箏・一作祖詠詩（箏の演奏を見る）	卷一一五	王湾
	聞鄰家理箏（隣家から箏の演奏を聴く）	卷一二四	徐安貞
	聽流人水調子（流浪していた楽人の水調歌の演奏を聴く）	卷一四三	王昌齡
	聽箏（箏を聴く）	卷二五七	柳中庸
②	宴席賦得姚美人拍箏歌（宴会で姚美人は箏曲を演奏する）	卷二七七	盧綸
	聽崔七妓人箏（崔七という楽伎の箏の演奏を聴く）	卷四三八	白居易
	贈箏妓伍卿（箏妓伍卿に贈る詩）	卷五一九	李遠
	彈箏人（箏を演奏する人）	卷五七九	温庭筠
	李周彈箏歌（李周という楽伎が箏を演奏する）	卷六八七	吳融

表2 箏の字が題目に用いられた詩

表2に整理した詩からは、唐代の詩人が創作に際して箏をいかに題材としようとしたかがわかる。例えば、姚美人、崔七、伍卿、李周などは他の史料では窺い知ることができない。箏を演奏する名手（女性）たちの存在とその演奏の様子を、具体的にその名前と共に知ることができる。

ここではさらに『全唐詩』から抽出した箏の詩をもとに、以下の三つの側面から考察する。一つ目は、箏の演奏についての表現と、その中に含まれる演奏用語が描写しようとする内容である。二つ目は、箏の演奏場面についての描写である。三つ目は抽出した箏の詩の中でどのような立場の人が扱われ、どのような感情表現に箏が関わっているかである。

### 3.2 箏の演奏用語を含む詩

唐代の詩人が箏の演奏について詠んでいる詩で演奏用語を用いたものは全部で16編ある。中木愛(2006)は、唐詩における琴と琵琶の演奏法の描写<sup>11</sup>を検討した。また、本稿の4以降でも他の楽器と関わる音楽詩の概要を示し、ここでは楽器の種類に関わらず、演奏用語を交えて音楽描写が行われている様子を論じている。箏の演奏用語を用いた詩を分析することで、箏の奏法の詳細を知ることができると考える。

詩から抽出した箏の演奏用語は表3の通りである。箏の演奏用語は、全部で掩、抑、弄、彈、調、抽弦、促柱、回旋、拂弦の九種類がある。詩の句や描写を検討し、その用語が示す効果や奏法についても表3の中に示した。

整理した詩から理解できたことは以下の通りである。

まず、一つの詩の中に奏法に関する用語が一つに限らず、二、三の語が用いられる例もある。複数の用語が用いられる場合、その用語はよく似た奏法を示すことが多い。例えば「聽箏」(卷四八) および「李湖州孺人彈箏歌」(卷二六五) に用いられる掩と抑という二つの用語は、箏の左手奏法として多く用いられる用語であるが、演奏効果が異なっている。掩は右手で元の音を弾いてから左手で絃を押

箏の奏法に関する用語	用語の説明	この奏法がもたらす効果	題目	巻数	作者	用語説明の解釈の根拠
掩 (yan) 左手	絃を弾いてから左手で絃を押す	調弦にない音を奏でる	聽箏 李湖州孺人彈箏歌	卷四八 卷二六五	張九齡 顧況	先行研究 <sup>12</sup> (筆者の)演奏経験に基づく
抑 (yi) 左手	絃を弾く前に左手は絃を押し、そのままの状態を保つ	調弦にない音を奏でる	聽箏 李湖州孺人彈箏歌	卷四八 卷二六五	張九齡 顧況	先行研究 <sup>13</sup> (筆者の)演奏経験に基づく
弄 (nong)	右手が絃を弾く時、左手を上下に押して音を変化させる	発音される音にヴィブラートを付ける	於長史山池三日曲水宴 觀搗箏・一作祖詠詩 邯鄲南亭觀妓	卷八四 卷一一五 卷一七九	陳子昂 王灣 李白	字そのもののもつ意味 (筆者の)演奏経験に基づく
彈 (tan)	はじく	(通常、箏を発音する時の動作)	高樓夜彈箏 夜坐見搗箏 夜箏 聽夜箏有感 李周彈箏歌	卷一四四 卷一四五 卷四四二 卷四四二 卷四五四 卷六八七	常建 王諱 白居易 白居易 白居易 吳融	字そのもののもつ意味 (筆者の)演奏経験に基づく
調 (tiao)	箏柱を動かす	音の高さを変える	夜坐見搗箏	卷一四五	王諱	先行研究 <sup>14</sup> (筆者の)演奏経験に基づく
抽弦 (chouxian)	箏絃を指や爪でゆっくりと搔き回すようにひく	箏絃が全音域にわたってゆっくり搔き鳴らされる	聽箏 傷秦姝行	卷二五七 卷三五六	柳中庸 劉禹錫	中国語の現代語訳 <sup>15</sup>
促柱 (cuzhu)	箏絃を指や爪で速く搔き回すようにひく	箏絃が全音域にわたって速く搔き鳴らされる	聽箏 李湖州孺人彈箏歌 夜聞商人船中箏	卷二五七 卷二六五 卷三六五	柳中庸 顧況 劉禹錫	中国語の現代語訳 <sup>16</sup>
回旋 (huixuan)	箏絃を右手で往復させる	全音域の箏絃がはじかれる	宴席賦得姚美人拍箏歌	卷二七七	盧綸	字そのもののもつ意味 (筆者の)演奏経験に基づく
拂弦 (fuxian)	絃をはじく	はじく	聽箏	卷二八六	李端	詩の中で用いられている文脈から(筆者の)演奏経験に基づく

表3 箏の演奏用語

すことにより、音が高くなる。一方、抑は左手で絃を押さえて弾き、のちにその手をゆっくり放す。そうすることにより、音の高さは弾いた音よりも少し低くなる。

また、「聽箏」(巻二五七)に用いられる抽弦と促柱という用語では、両方とも指や爪で搔き回すという共通の奏法だが、用いられるテンポが異なる。『唐詩鑑賞辞典』(2013, 732)によれば、「抽弦」ではゆったり弾くのに対し、「促柱」では速く弾く。これについては、「聽箏」(柳中庸 巻二五七)、「傷秦姝行」(劉禹錫 卷三五六)と「夜聞商人船中箏」(劉禹錫 卷三六五)を例に挙げ、少し詳しく見てみたい。

「抽弦」は「傷秦姝行」の中で「抽弦緩調怨且長」(抽弦してゆったりとしたメロディーを演奏し、悲

しく恨めしい情感がもたらされる)として用いられ、「抽弦」のゆっくり掻き鳴らす奏法が「緩」という言葉で表現されている。また、「促柱」は「夜聞商人船中箏」の中で「新聲促柱十三弦」(新しい曲が促柱の技法を用いた十三絃箏で奏でられた)として用いられ、大型船の中で誰かが箏を弾く様子が描かれている。「抽弦」と「促柱」が両方使われる「聽箏」では、「抽弦促柱聽秦箏」(抽弦促柱を用いて演奏し)のように用いられ、その結果、緩急がもたらされ、悲しみや恨めしさだけでない複雑な感情を表すと推察できる。先述した「抽弦」を用いた詩の中で「怨且長(悲しく恨めしい情感がもたらされる)」とあるように、奏法と情感の結びつきが少なからず感じられる。ただし、「促柱」に関しては、それがもたらす効果について他の事例を通して引き続き検証したい。

このような箏の演奏を詠んだ詩を通して、演奏を直接見聞きした詩人が適切に演奏用語を選択し、演奏の様子と、それによってもたらされる感情を具体的に描こうとしていることが理解できた。すなわち、箏の演奏用語が含む具体的な内容を詩人たちが認識していたと推察できるのである。上記から、唐代の詩人には音楽的素養、とりわけ楽器演奏に関する知識や深い理解があったと判断できる<sup>17</sup>。

また、箏の演奏用語を用いたこのような詩人たちの表現をつぶさに検討することによって、唐代の箏の奏法についても推測できると考える。これら詩人たちの中には自ら箏を演奏していた者が複数いることが確認されているからである。なお、表3の九種類の用語のうち現代においても使われているのは「弾」という用語だけで、その他の用語はその後、「掩」は「按」に、「抑」は「回滑」に、「弄」は「顫音」に変化している<sup>18</sup>。「抽弦」と「促柱」は「刮奏」にまとめられ、演奏時の速さだけで区別される。「回旋」という用語は、現代の奏法では使われていない。

### 3.3 箏の演奏場所・場面について

今回、検討したうち、箏が演奏される場所や場面に触れている詩は全部で12編ある(表4を参照)。

題目	巻数
箏	巻五九
興盧象集朱家	巻一二六
青楼曲二首	巻一四三
春日行	巻一六二
秦箏歌送外甥蕭正婦京	巻一九九
白苧詞	巻二七三
聽崔七妓人箏	巻四三八
夜聞箏中彈瀟湘送神曲感舊	巻四五八
聞箏歌	巻四九二
贈箏妓伍卿	巻五一九
京中客捨聞箏	巻五六一
李周彈箏歌	巻六八七

表4 箏の演奏場所・場面に触れている詩

これらの詩の多くは、詩人が実際に箏を鑑賞した上で、あるいは過去に鑑賞した記憶に基づいて詠んだと推察される。以下に五つの例を示す。

白居易の「聽崔七妓人箏」(卷四三八)には、「花臉雲鬢坐玉樓，十三弦里一時愁」(綺麗な化粧をして、美しい箏を挿して、楼の中に座って、十三絃箏の悲しい音楽に浸っていた<sup>19</sup>)という詩句があり、崔七という箏の楽伎が「楼」という場所で演奏していたことが示されている。

また、呉融の「李周彈箏歌」(卷六八七)「就中十三絃最妙，應宮出入年方少」(楽器の)中でも十三絃箏は得意で、幼少のころはよく宮廷に出入りして演奏した)の「應宮」は宮廷を示し、箏の演奏が宮廷の宴会でも行われていたことが示されている。唐代の宮廷音楽、すなわち燕樂<sup>20</sup>は唐代の皇帝たちの支持を受けて急速に発展し、宮廷の宴会や各種の祝典で演奏された。その中で箏の演奏機会も多かった。この詩では、題目にその名が示されている李周という楽伎は宮廷楽人ではなかったが、その腕前によって宮廷に入り、箏を演奏していた出来事を詠んだと判断することができよう。

唐代の燕樂は主に宴会や宮廷の娯楽で使われたが、その後は貴族の家においても鑑賞された(関 2006, 33)。次の例「贈箏妓伍卿」(李遠 卷五一九)では、楽伎が宴会で箏の演奏を行ったことを示している。

輕輕沒後更無箏， 輕輕が亡くなった後は、  
玉腕紅紗到伍卿。 伍卿が登場するまでは彼と同じぐらいの高みで箏が弾かれることはなかった。  
座客滿筵都不語， 昔は盃を酌み交わし、談笑していなかった(演奏に集中していた)が、  
一行哀雁十三聲。 今は箏の音がすると、あたかも十三絃の上に哀雁の一行が飛び交うようだ(伍卿の演奏が素晴らしいので、再び集中して聴かれるようになった)。

まず、題目と詩行から詩人は伍卿という楽伎の演奏を高く評価していたことが読み取れよう。また、「座客」からは、楽人の演奏の場に客が鑑賞していたこと、「滿筵(筵:酒宴の席)」からは、ある満席の宴会の中で箏の演奏が行われたことが読み取れる。この二つの言葉は宴会など客をもてなす場所で箏の演奏が行われていたことを示し、この詩の表現が詩人の創作ではなく、過去の出来事に基づいて詠んだものと推測できる。

「青楼曲二首」(王昌齡 卷一四三)の(一)には、將軍が戦争を勝利して帰朝したときの歓迎と歡喜の様子が描かれる。

(一)

白馬金鞍隨武皇， 將軍は白馬に乗って出征し、  
旌旗十萬宿長楊。 長楊宮には十萬の兵が宿った。  
樓頭少婦鳴箏坐， (詩人は)階上の窓際の楽伎が箏を弾き、  
遙見飛塵入建章。 (將軍たちが)行列の塵を立てて建章宮に入っていく(のを眺める)。

この題目は楽伎が箏を青楼<sup>21</sup>で演奏していたことを示している。このことは、唐代において青楼のように高貴な人や女性が住む家で演奏することが箏の使用場面の一つであったことを推察する根拠と

なろう。

ところで、教坊の楽伎は役割により、それぞれ「内人」、「宮人」や「搦弾家」に分けられる<sup>22</sup>。詩の中の演奏場面に登場する楽伎や教坊で箏を演奏する楽伎がすべて女性であることから、唐代の箏を演奏する楽伎の多くは女性であったと推測される。

最後に夜の演奏場面が詠まれている例である。同じく白居易の「夜聞箏中彈瀟湘送神曲感舊（夜、箏曲の「瀟湘送神曲」を聴いたことで感情が溢れ出る）」(卷四五八)の「萬重雲水思, 今夜月明前」(千万の雲も水も、今夜の月明かりに [映る]) という詩句には、詩人が鑑賞した箏の演奏場面についての具体的な描写はないが、「今夜」、「月明かり」という言葉がある。題目とこの詩行から、前述の「夜聞商人船中箏」同様、箏が夜に演奏される機会もあったと判断できる<sup>23</sup>。

### 3.4 箏の詩の中で扱われる人と表現される感情

箏が描かれる唐代の音楽詩には、音楽によって引き起こされる感情が詠まれている。

「聽流人水調子」(王昌齡 卷一四三) は、王昌齡が左遷された時、たまたま夜に箏の演奏を耳にした場面を詠んだものである。

孤舟微月對楓林, 月の下の舟は、楓の林にむかって、  
分付鳴箏與客心。 客の気晴らしに箏を弾かせていた。  
嶺色千重萬重雨, 山嶺（大庾嶺、現在の湖南と広東の間にある）には霧雨が立ちこめていて、  
斷弦收與淚痕深。 箏絃の切れたものが、涙袋を深くした。

「箏絃が切れる」という出来事がきっかけとなり、急に深い悲しみが引き起こされた様子が示されている。気晴らしとしての箏の演奏が些細な出来事をきっかけに瞬時に別の感情へと移り変わる道具立てとなっている。

また、「秦箏歌送外甥蕭正帰京」(岑参 卷一九九) は、甥を見送った詩人の悲しみを箏の演奏で表現している。

汝不聞秦箏聲最苦, 秦箏<sup>24</sup>は音が最も苦く、  
五色纏弦十三柱。 五色混ざった箏の絃が十三本、柱にかかって張られている。  
怨調慢聲如欲語, 訴えかけるような、ゆっくりとした節回しで、  
一曲未終日移午。 まだ一曲も弾かないうちに昼近くになっていた。  
紅亭水木不知暑, 紅亭池の水木は暑さを知らず、  
忽彈黃鐘和白紵。 秦箏は忽ち「黄鐘（曲名）」「白紵（曲名）」を弾き始めた。  
清風颯來雲不去, 風はざわざわして雲は留まり、  
聞之酒醒淚如雨。 酔いがさめてからは涙が雨のように降る。  
汝歸秦兮彈秦聲, 秦の地に帰るあなたのために弾く秦の声<sup>25</sup>、  
秦聲悲兮聊送汝。 秦の声は悲しい、外甥の出発を送る。 （下線は引用者による）

「秦箏聲最苦」の「苦」は箏の音が苦しみの感情を表すことを意味する。ところで、馮燦は楽器の音色が異なる特徴を持ち、それぞれが異なる感情を表現するとしているが、彼によれば琴の音色は低く、琵琶の音色は薄い。また、笛は高いが、箏だけがこれらの楽器の音色を持ち合わせており、唐代には箏の表現する感情の多くが苦しみであったとしている（馮 2020, 5）<sup>26</sup>。この詩で箏の音が苦しみを表現しているとした根拠である。岑參は甥の帰った場所を今は亡き「秦」と表現し、秦箏を演奏して、離れる期間の悲しみを表した。また、演奏したことで詩人自身、感情を触発された様子も詠んでおり、ここから箏の演奏が深い愁いと悲しみを表現していると読み取れる。

「聽箏」(柳中庸 卷二五七) は、夜に箏の演奏を聞く詩人の孤独を描いた詩である。「抽弦促柱聽秦箏，無限秦人悲怨聲」(誰かが抽弦促柱(奏法)を用いて演奏し、詩人は箏を聴く、秦人の悲怨の音を思わせる)のうち「悲」と「怨」は、箏曲の音の悲しみと愁いの感情を表現する。

また、「箏」(元稹 卷四二二) は、女性の片思いが報われないことを表現している。「莫愁私地愛王昌，夜夜箏聲怨隔牆」(莫愁は王昌に恋して、毎夜に箏を奏でて片思いの悲しみを表す)には、女性が毎夜に箏を奏でて恨みを表現していることが描かれている。この詩は詩人が恋について詠んだ詩で、演奏者を主人公に男性の薄情さに対する哀しさを描いている。恋に関する恨みを詠んだ詩は、箏の演奏にまつわる物語を借りて、詩人自身の感情を表現した(馮 2020, 3)。

上記四つの詩の内容を見ると、箏は夜によく演奏され、恨み、悲しみなどの感情が表現されている。しかし、逆の例も箏を詠んだ詩にはある。例えば「青樓曲二首」(王昌齡 卷一四三)の(一)「樓頭少婦鳴箏坐，遙見飛塵入建章」(詩人は、階上の窓際の楽伎が箏を弾くのを聴き、行列が勇ましく塵を立てて將軍たちが建章宮に入っていくのを眺める)では、戦争に勝利した喜びから楽伎が喜ばしく箏を演奏している様子を詠んだ。ここでは夜ではなく日中に演奏されている。

また、感情を表現することなく、宴会で箏を演奏する場面だけを詠んだ詩がある。「於長史山池三日曲水宴(長史山池で3日間、宴会をする)」の「金弦揮趙瑟，玉指弄秦箏」(金色の絃の趙瑟を演奏する、指で秦箏を弾く)では、夜ではなく、曲水の宴で箏を演奏する場面を詠んだものである。

馮(2020, 14)によれば、箏の感情表現の属性は唐代に箏の演奏に従事していた人々の出自とも関係がある。箏を演奏する楽伎の多くが女性で、王権や貴族に従属して彼らのために演奏し、自らの人生を切り拓くことができなかつた立場にあった(馮 2020, 15)。楽伎の中には身分違いの愛情に苦しんだケースもあったことから、箏楽で悲しみと憎しみが表現されるようになった、としている(馮 2020, 15)。上記の例と馮の研究から、詩人や詩に登場する楽伎が箏の演奏を聴いたり、演奏したりする際には悲しみ、苦しみなど負の側面が表現されることが少なからずあることが確認できた。

#### 4. 唐詩における他の楽器

唐代の音楽詩において、詩人たちは箏だけでなく他の楽器についても詠んでいる。中でも琴、琵琶、笛は代表的な楽器として描かれる。ここでは箏の属性を理解するための参考事例として、これら三つの楽器について詩から読み取れるイメージをまとめた(表5)。

それぞれの楽器のイメージを以下に概観しておく。

題目	楽器	巻数	作者	詩における楽器のイメージ
琵琶	琵琶	卷五九	李嶠	西域地域の少数民族による音楽のイメージを持っている
琵琶	琵琶	卷四一五	元稹	少数民族による音楽の雰囲気があり、辺塞 <sup>27</sup> と結びついている
春聽琵琶兼簡 長孫司戸	琵琶	卷四四〇	白居易	琵琶は胡族の音楽スタイルを持っている
清溪半夜聞笛	笛	卷一八二	李白	郷愁、辺塞
舟中月明夜聞笛	笛	卷三一〇	於鵠	夜の屋外で演奏される笛が、孤独な気持ちを表す
長城聞笛	笛	卷三三三	楊巨源	夜の笛の音と辺関の将の感情を表す
廢琴	琴	卷四二四	白居易	文人たちは、琴をより品格のあるものと考えていた
聽彈古淥水	琴	卷四二八	白居易	琴曲を聴き、気持ちをすっきりさせる
清夜琴興	琴	卷四二八	白居易	リラクゼーションをする
好聽琴	琴	卷四四五	白居易	琴を聴くことで心の悩みを解消できる

表5 唐詩における他の楽器のイメージ

#### 4.1 琴

琴は七絃琴とも呼ばれ、具体的な誕生時期は不明だが、上古の皇帝伏羲<sup>28</sup>によって作られたという伝説が残されている。琴は単なる娯楽のための楽器ではなく、文人たちの精神と深く関わっている(谷口 2003, 52)。

琴のイメージおよび琴と詩人との関係を示す詩の例として白居易の「廢琴」(卷四二四)、「聽彈古淥水」(卷四二八)、「好聽琴」(卷四四五)が挙げられる。

具体的な詩行は紙幅の関係で割愛するが、「廢琴」では、詩人が琴に高尚なイメージを持っていたこと、楽器の中で琴の地位が高くなったことを示す表現が含まれ、唐の時代に琴が宮廷音楽としては冷遇されたが、文人たちは琴を教養と結びつけてとらえ、好んだことがわかる。

「聽彈古淥水」は詩人が琴曲の音楽を聞くことによって情操を培っている様子を描写しており、琴が詩人の内面と密接な関係を持っていることを示す琴独特の特性でもある。

「好聽琴」では、琴曲を演奏することで心を落ち着かせることができることが示されている。

この三つの詩は琴が詩人の心と深く結びつき、琴の演奏が人々の情緒を安定させるものであったこと具体例である。琴が人間の精神に影響を与える<sup>29</sup>というイメージを持たれていたことを示唆するものである。

#### 4.2 琵琶

唐代には、曲頸四絃琵琶と直頸五絃琵琶、秦琵琶(阮咸)の三種類があった。唐代に一般的に琵琶と呼ばれていたのは曲頸四絃琵琶であるため(谷口 2003, 57)、ここでは曲頸四絃琵琶を中心に扱う。唐代の音楽詩の中で琵琶に関連する詩をまとめると、琵琶と少数民族の密接な結びつきや「辺塞」という言葉が詩の中に見出せる。したがって、琵琶は少数民族の音楽を想起させる性質があると捉えることができ、辺境の方がより琵琶のイメージを強くしている。さらに「胡」という少数民族が関係している<sup>30</sup>ことも推測される。

李嶠の「琵琶」(巻五九)は、琵琶が西域地域の少数民族音楽による性格を持つことを記し、琵琶が少数民族の音楽の性格を持っていたことを表している。

元稹の「琵琶」(巻四一五)でも、琵琶は少数民族との関係を示し、その音楽も胡族のものであったと考えられる。

張祜の「玉環琵琶」(巻五一)は、楊貴妃が宮廷の宴会で琵琶を演奏したことが記されている。また、唐代には教坊という機関が配置され、燕楽の管理と教習を主な機能としていた。唐代には音楽専門の機関の中に楽器演奏に従事する女性楽伎がいたのである。以上の内容から、唐代の琵琶演奏者の多くは女性であったことを指摘したい。

#### 4.3 笛

笛は漢武帝<sup>31</sup>の時代に丘仲<sup>32</sup>が作った管楽器、あるいは羌族<sup>33</sup>の楽器であったという説がある(谷口2003, 58)。全唐詩の中から笛を扱った音楽詩を整理してみると、笛の演奏場所はほとんど屋外であることがわかる。その理由は、笛の音は長くよく響き、屋外でも遠くまで聞こえるからと推察できる。また、笛は夜に演奏される場合も多く、辺塞との関係も指摘されている<sup>34</sup>。

李白の「清溪半夜聞笛」(巻一八二)は、辺塞での笛の演奏を通して故郷への思いを表している。題名から笛の演奏場面は夜であることがわかる。また「隴水<sup>35</sup>」という言葉が辺塞に関係していることから、ここでも笛と辺塞との関わりが指摘できる。

岑參の「秋夜聞笛」(巻二〇一)は、笛には哀愁を表す性質があることを示している。「夜」は笛の演奏場面が夜であることを示し、笛の音を聞いた異邦人の故郷への思いを表している。

また、「長城聞笛」(楊巨源 巻三三三)では、辺境にある将軍が郷里への思いを詠んだ。「舟中月明夜聞笛」(於鵠 巻三一〇)では、笛が夜の屋外で演奏される。笛を聞くと一人で故郷を離れた時のことを思い出すことが詠まれ、自分一人の孤独な感情を表している。

以上の例から、唐の時代には笛が詩人の内面に影響する楽器と受け止められていたことが理解できた。

#### 4.4. 他の楽器との比較を通して見る箏の特性

これまでに箏、琴、琵琶、笛それぞれについて、音楽詩の中での用いられ方を検討してきたが、ここからは四つの楽器の比較によって、箏の持つ特性を明らかにする。

楽器	演奏場面/機会	演奏者	イメージ
箏	宴会(宮廷内と宮廷外)、外教坊、青楼、夜	楽伎(女性)	愁い、恨み、悲しみの感情を表現する
琴	個人宅で精神を落ち着かせる目的で	文人自身(男性)	高尚、リラックス、人間の精神に影響を与える
琵琶	宴会(宮廷内と宮廷外)、辺塞	女性、楽伎(女性)	少数民族
笛	屋外、夜	特定されない	故郷への思い

表6 箏と他の楽器の比較

表6を通して箏と他の楽器を比較すると、演奏場面においては、箏と琵琶は宴会で演奏され、夜という点では笛と共通している。そして教坊での搦弾家という楽伎の仕事との関わりから、箏と琵琶は同じ教坊の中で用いられていた。また、琵琶と異なる演奏場面としては、青楼を挙げることができる。演奏はすべて女性の楽伎である。

楽器のイメージについては、箏と琵琶は非常に異なり、琵琶は少数民族の音楽の性格や辺境のイメージを持つのに対し、箏は悲しみ、恨みなどに対する感情を表現する。

箏と琴は同じ絃楽器でありながら、演奏場面、演奏者、楽器のイメージがそれぞれ異なっている。本稿の4.1で触れたように、唐代には、一般に琴よりも箏の方が親しまれていたことが見て取れる。音楽詩における箏と琴の記述を分析すると、箏は、唐代に宮廷音楽が興隆し、そこで使用された楽器の一つとして、より好まれるようになったことから流行したと考えられる。

箏や笛は夜に演奏されることが多く、感情を表現することがある。しかし、箏は屋内で用いることが多いのに対し、笛は屋外で用いることが多い点で異なる。これは楽器の特性によるところが大きい。また、感情の表現についても、箏と笛とは異なり、箏は恨み、愁い、悲しみなどの感情を表すことが多いのに対し、笛は郷里への思いが込められることが多い。

したがって、箏は他の楽器との共通点がありながらも、演奏場面や楽器のイメージに独自の特性を持っていると理解できる。

## 5. まとめ

本稿では、唐代の音楽詩のうち、箏に関する詩を抽出し、他の楽器とも比較しながら唐代における箏とその音楽の特性を理解することを目指した。具体的には箏の奏法を示す用語を抽出し、また音楽詩に描かれた箏の演奏場面と箏を演奏する楽伎を考察した。ここで得られた唐代の箏の奏法用語は先行研究、字そのものの意味、および演奏実践を総合することで分析できると判断した。また、箏の演奏場面は主に宴会、教坊、青楼であったことが明らかになった。詩の題名や詩中で使われる言葉からは夜に演奏されることが多いのも、箏の特性の一つだと考えられる。担い手については、詩の中の楽伎についての描写や教坊に女性の楽伎が配置されていたことから、唐代に箏の演奏に従事していた多くの奏者が女性であったことがわかる。さらに箏のイメージについては、例に挙げた詩の中には、稀に箏を演奏する情景と感情を描かず、宴会で箏を演奏する場面だけを詠んだ詩も存在するが、先行研究や「聽流人水調子」「秦箏歌送外甥蕭正婦京」「聽箏」などの詩の内容で確認したように、悲しみ、苦しみなど負の側面が主に表現される傾向があることが見出せた。楽器のイメージという点からは琴、琵琶、笛と比べて、箏は主に負の感情を表現することが指摘できよう。また、演奏場面では琵琶や笛と同様、箏も夜の屋内や青楼で演奏される。しかし、箏の演奏場面についての更なる分析や奏法用語についての考察は、今後の課題として引き続き検討する。

## 註

- 1 『旧唐書』『新唐書』。なお、この原文と訳については、筆者による国立音楽大学大学院に提出した修士論文

(2021年)に記載した。

- 2 中木愛 「白居易の音楽描写における「音」の要素の盛り込み方」、50頁。
- 3 本稿には詩の内容と奏法の用語の場合は「弦」で、それ以外の場合は「絃」を使用する。
- 4 演奏する時の手の奏法を指す用語である。
- 5 中木愛 「白居易の音楽描写における「音」の要素の盛り込み方」、65頁。
- 6 中純子 『詩人と音楽』、8-9頁。
- 7 本稿では谷口高志「唐代音楽詩における楽器のイメージ—琴・箏・琵琶・笛—」で音楽に関する詩を音楽詩と呼んでいることから音楽詩という呼称を用いている。楽器名や楽人の名前が詩に含まれる詩などである。
- 8 関也維 『唐代音楽史』、12頁。
- 9 張雨萌 「唐代渉楽詩」、1頁。
- 10 特に音楽に従事する女性を指す。
- 11 中木愛 「白居易の音楽描写における「音」の要素の盛り込み方」、60-67頁。
- 12 謝明 「唐代箏楽研究」、47頁。
- 13 同上
- 14 同上
- 15 俞平伯他 『唐詩鑑賞辞典』、732頁。
- 16 同上
- 17 詩人たちが詩の中で用いたこれらの奏法の用語を演奏家たちも実際に使っていたかどうかについては、現在調査中である。
- 18 「悠揚思欲絶掩抑態還生—浅析唐代箏技及其芸術表現力」、156頁。
- 19 なお、詩の日本語訳は筆者によるものである。日本語訳を作成するにあたり、本学の下田誠先生にご指導をいただいた。
- 20 宮廷の宴会で鑑賞する音楽である。
- 21 高貴な人や美女の住む家。あるいは遊女屋の意味がある。この意味では高貴な人や美女の住む家である。
- 22 「内人」は教坊の主要な役人、「官人」は内人が不足している際の補填要員、「搊弾家」は庶民の女子から拔擢されて箏、琵琶、箜篌などの楽器を習得する者である（関 2006, 215）。
- 23 箏以外の楽器が一日のいつ演奏されるかについては、4で言及している。
- 24 箏は秦代（紀元前221年～紀元前207年）の蒙恬が作ったと伝えられているため、秦箏とも呼ばれる。
- 25 詩の「秦の地に帰る」「秦の声」はいずれも「秦箏」という言葉と対応させた表現である。
- 26 日本語では「音色が高い」「薄い」とは表現しないが、馮燦は日本語の「音色」と同じ意味をもつ中国語の「音色」という言葉を用いて、この部分を説明している。
- 27 都から遠く離れた国境の地。なお、中国には「辺塞詩」と呼ばれるジャンルがあり、「中国唐代の詩で、辺境地帯の中国唐代の詩で、辺境地帯の風土や自然をうたったもの。西域の諸民族との抗争が増えた盛唐期に、高適・岑参・王昌龄などがこの分野に特色を発揮し、辺塞詩人といわれた。」と説明される。（デジタル大辞泉「辺塞詩」より）

<https://www.weblio.jp/content/%E8%BE%BA%E5%A1%9E%E8%A9%A9?dictCode=SGKDJ> 2022年

10月3日最終アクセス)

- 28 古代中国の創世神話に登場する伝説上の皇帝。
- 29 谷口も「唐代音楽詩における楽器のイメージ—琴・箏・琵琶・笛—」の中で同様に主張する。55頁。
- 30 谷口も「唐代音楽詩における楽器のイメージ—琴・箏・琵琶・笛—」の中で同様に主張する。57頁。
- 31 西漢の七代目の皇帝、在位はB.C.141～B.C.87年である。
- 32 丘仲は漢の武帝の時代の楽人である。
- 33 羌族は中国西部の古い民族である。
- 34 谷口も「唐代音楽詩における楽器のイメージ—琴・箏・琵琶・笛—」の中で同様に主張する。59-60頁。
- 35 甘肅省にある川。

## 引用・参考文献

### 【中文】

- 馮燦 2020 「唐詩中「哀箏」意象的美学研究」修士論文 南京：南京芸術学院
- 関也維 2006 『唐代音楽史』北京：中央民族大学出版社
- 劉利連 2015 「悠揚思欲絶掩抑態還生——淺析唐代箏技及其芸術表現力」『北方音楽』3：156-156
- 劉昉、張昭遠他著 1975 『旧唐書』北京：中華書局
- 欧陽脩、曾公亮著 1975 『新唐書』北京：中華書局
- 孫通海、王海燕編 1999 『全唐詩』北京：中華書局
- 謝明 2007 「唐代箏樂研究」修士論文 湖南：湖南師範大学
- 俞平伯他著 2013 『唐詩鑑賞辞典』上海：上海辞書出版社
- 張雨萌 2020 「唐代涉樂詩」修士論文 瀋陽：瀋陽師範大学

### 【和書】

- 谷口高志 2003 「唐代音楽詩における楽器のイメージ：琴・箏・琵琶・笛」『待兼山論叢』37：51-66
- \_\_\_\_\_ 2004 「唐詩の音楽描写—その類型と白居易「琵琶引」」『日本中国学会報』56：78-93
- \_\_\_\_\_ 2009 「唐代音楽詩の研究：詩は音楽を表現しうるか」博士論文 大阪大学
- 中純子 2008 『詩人と音楽』東京：知泉書館
- \_\_\_\_\_ 2020 『唐宋音楽文化論』東京：知泉書館
- 中木愛 2006 「白居易の音楽描写における「音」の要素の盛り込み方」『白居易研究年報』7：49-73
- 山本敏雄 1998 「「秦箏」あるいは「箏」について—白居易の文学と音楽のための覚え書—」『愛知教育大学研究報告. 人文科学』47：79-85
- 吉田聡美 1984 「全唐詩における音楽描写—琴—」『筑波中国文化論叢』4：49-66
- 李嫣寒 2021 「唐代燕樂の箏と平安時代の雅樂の樂箏の比較—日中両国の音楽受容の考察を通して—」修士論文 国立音楽大学大学院
- \_\_\_\_\_ 2022 「中国唐代の宮廷音楽と日本の初期雅樂の管理組織をめぐって」『国立音楽大学大学院研究年報』34：265-275